

播磨 まちかどニュース

With いなみ野学園

瓦版



兵庫県いなみ野学園では、大学院生などの受講生が自主制作として、地元ケーブルテレビ局「BAN-BAN テレビ」と協働し、テレビ番組「播磨まちかどニュース With いなみ野学園」を制作しています。学園内外の魅力的な活動を映像で紹介する15分の番組です。瓦版では、これまでの配信動画の内容を紹介しています。

★★最新の配信動画★★

現在、いなみ野学園ホームページに掲載している動画をご紹介します。

播磨まちかどニュース with いなみ野学園 106

藤原洋次郎～絵画教室と作品展～

◆配信日 令和7年9月1日◆



明石市出身の藤原洋二郎さん。子どもの頃から絵が得意で、ずっと絵に親しみ、美大を出てからは団体展などにも活躍されてきました。ただ、30代になって、「体が欲しがる仕事をしたい」と、西洋画でもない、日本画でもない、独自の世界を作ろうと今の世界観に至ったそうです。紙を貼ったその上に水と絵具で描くと水で紙がふやけ、それに絵具で表現すると思わぬ事象の作品が出来るのだそうです。

今回は、藤原さんの兵庫大学での授業風景と、ご自身の「作品展」の模様をお伝えしましょう。



兵庫大学での授業は、抽象画ではなく、あくまでも具象絵を指導されています。名画を手本にトレーシングペーパーで写し取り、その元絵そっくりに絵を描く「模写」だとのこと。正に、「真似る」ことが絵の基本なのでしょうね。生徒のみなさんも集中して取り組み、また、互いに教え合ったりしながら、和気あい

あいの様子でした。

授業の中で、藤原先生にインタビューを試みました。

先生曰く、「一つは、自分の持っているもの、学んだものをできるだけたくさんプレゼントしたい。もう一つは、従来と違う、短期間で必要なものを教えたい」とのこと、で、「初めの10分間は、美術史とか造形の技術などを毎回伝えている」そんな授業だそうです。

生徒のみなさんにもインタビューして感想を聞きました。

Aさん「好きな写真や名画を模写することをやっています。先生のお陰で毎週楽しく描いています」

Bさん「上手下手など考えず楽しくやりたいです。2年半、少しずつ上達してきたかな。人物画を描くのが好きです」

Cさん「アクリル絵の具を使ったことがなかったのを、先生は「そういう方を待っていました」と言ってくれ、いきなり「模写」を始めました。先生のニコニコ顔に引かれて、ずっと続いています」以上のような感想でした。



次に、藤原先生の「作品展」が姫路市の三木美術館で開催され、私たち取材班は令和7年7月17日（木）に訪れました。タイトルは『藤原洋次郎ー自然と平面の出会いー（物質の時間の視覚化）』とのこと。

「作品展」のパンフレットにも、西洋画でもなく日本画でもない、自分の描きたい、体が欲するままに描くことで独自の世界観に至った

『藤原ワールド』だそうです。



紙を貼った上に水・絵具で表現した抽象的な絵。ただ、私には「理解するにはちょっと難しかった」が正直な感想です。とはいえ、絵具をそのまま塗るのではなく、紙を貼り、その上に絵具で色を塗るなど、絵の表現の仕方に驚きました。

先生が小さい頃に見た風景。風の塊が通り抜けて、稲穂がなびき、稲妻のような形で、後に残っていた。鮮明に今も頭にあり、それをストレートに表現してみようと、今の抽象画に行き着いたと言います。「体が欲しがるとまに」その結果なのでしょうね。そこでひとこと、「己の欲するまに 拓いた自由な世界 ここにあり」。

みなさんも、兵庫大学で藤原先生の「絵の授業」を一緒に学びませんか。



(ナレーション 古川千代子)

『秋に向かう時期に咲く花々』

◆配信日 令和7年9月16日◆



二十四節気の一つ「処暑（しょしょ）」つまり段々と暑さが収まってくるころが「処暑」ですが、相変わらず暑さが続いています。今年は特に暑いですね。

今回は、この暑さの中で一生懸命に咲いている花々を紹介しましょう。特に、「百日紅（ひゃくじつこう）」通称「サルスベリ」の花を中心に紹介したいと思います。



サルスベリが「百日紅（ひゃくじつこう）」と名付けられたのは、この木の花がおよそ100日もの間、咲くため。それで百日咲く赤い花と、この漢字が使われたそうです。確かに6月初旬から咲き始め、夏の暑い盛りが一番のピークで、100日間咲いています。

ところで、サルスベリにこんな面白い話と言うか、「漢詩」があるのです。唐の杜朴と言う人が詠んだ七言絶句です。

タイトルは「紫薇花（しびか）」、紫の小さな花と言う題名です。中国ではサルスベリを「紫薇花（しびか）」と言います。確かに小さな紫色の花びらが集まっていますね。

唐の杜朴の『紫薇花（しびか）』

『曉迎秋露一枝新』

曉（あかつき）に 秋露（しゅうろ）を迎え一枝（いっし）新たなり

『不占園中最上春』

園中（えんちゅう）最上（さいじょう）の春を占（し）めず

『桃李無言又何在』

桃李（とうり）言（げん）無く また何（いず）くにか在（あ）る

『向風偏笑艷陽人』

風に向かって偏（ひとえ）に笑うは艷陽（えんよう）の人

この「紫薇花（しびか）」の意味は、サルスベリの花は、明け方に白露を迎えて、一枝に新たな花を咲かせる。

春景色の盛りの時期には知らん顔だったが桃や李（すもも）は、今は押し黙って どこに咲いているかもわからない。

サルスベリは、今、秋風に向かって ただただ春の花々をめでた人たちを冷笑するのだと言う意味だそうです。あれだけ春にちやほやされた花々は、今どこにも見えないし、春の花々をキレイだキレイだとほめそやした人たちに、冷笑して答えるのだと、面白いですね。

次は「ノウゼンカズラ」を紹介しましょう。



漢名は「凌霄花（りょうしょうか）」といい、音読みの「りょうしょう」が転じて「のうぜん」になったとも言われます。「嘗（し

よう)」は、「大空」を意味し、ツルが木にまといつき、空に向かって高く咲く姿を現しているそうです。

英語では、花の形がラッパに似ていることから「トランペットブライン」や「トランペッターバー」と呼ばれるそうです。花言葉の「名声」「名誉」は、勝利者を祝福するファンファーレで、トランペットを吹くことに由来しています。

花の色が「火」を連想するため「庭に植えると火事になる」との迷信が生まれた花でもあります。



もう一つ、「ミソハギ」です。「禊萩（みそぎはぎ）」説では、水で穢（けが）れを払う日本の「禊（みそぎ）」の儀式で、供え物を清めるのにミソハギが使われたことから「禊萩（みそぎはぎ）」と名付けられ、転じてミソハギとなったとされています。また、お盆の時期に見ごろを迎えることから、「盆花（ぼんばな）」や「精霊花（しょうりょうばな）」とも呼ばれます。

もう一つ、桔梗の花です。「万葉集」にある山上憶良が「秋の七草」を詠んだ和歌。

「萩の花 尾花（おばな） 葛花（くずはな） 撫子（なでしこ）の花 女郎花（おみなえし） また藤袴（ふじばかま） 朝顔の花」

秋の花を読み上げた歌、「秋の七草」として有名な歌ですね。

最後の「朝顔の花」は、当時は朝に咲くキレイな花を朝顔と呼び、桔梗のことを指したそうです。今の朝顔ではなく、桔梗の花です。



最後に「ド根性サルスベリ」と勝手に名付けました。県道野谷平岡線で、草に負けじと頑張っている「サルスベリ」です。ただ、道路の草刈り時に一緒に刈り取られてしまわないかと祈るばかりです。

如何でしたか、花と合わせてそれにまつわる話もいっしょに紹介しました。

最後にひとこと、「今を盛りと けなげに咲く花々は みなどれも美しい」



（ナレーション 大前小夜子）

【いなみ野学園 動画配信ホームページ】

https://www.hyogo-ikigai.or.jp/ikigai/video/video_inamino_summary.html



《編集・発行》

いなみ野学園 ビデオ制作委員会（いなみ野学園大学院講座・研究生） ☎ 079-424-3342